

## 第55回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

一本のトランペット

富山県 射水市立小杉中学校 三学年

加瀬 水香

「お祖父ちゃん、天国でも元気でやっているかな。」  
私が毎日トランペットを手にするときに思うことだ。いついかなるときも、私にとって一番大切なもの。そして、亡くなった祖父にとっても。それがトランペットだ。

七年前の三月、私が小学二年生のとき、祖父が亡くなった。急なことで、まだ幼かった私はその意味がよく分からなかった。しかし横たわってピクリともしない祖父を見て、もう祖父は生きていない、話すこともできないと分かってしまった。私は祖父に置いていかれたようでもまらなかった。それが悲しくて許せなくて、私はずっと泣いていた。結局私は祖父の葬式のあいだ仏頂面のまま過ごし、その忌まわしい日は終わっていった。

それから、七年の時が過ぎ、私は中学三年生になった。吹奏楽部に所属し、毎日トランペットを吹いて過ごしていた。私は中学一年生のときから、両親に自分の楽器が欲しいとよくねだっていた。しかし、両親の反応は芳しくなく、いつまでたっても買ってもらえなかった。なぜ買ってくれないのか。そう問いただすと、「お金がないのよ。あなた医者になりたいんでしょう。両立だつてできるの？」

と言われ、取り付く島もなかった。その日から私は死にもの狂いで部活も勉強もがんばり続けた。全てはトランペットのために、そう思つて。

決意を固めたその日から数カ月後、ついに私は自分の楽器を買ってもらえることになった。そのとき父は、私に話をした。

「本当はお金がなかったわけではなかった。だけど、そのお金はお祖父ちゃんの生命保険のお金だったんだ。お祖父ちゃんはお父さんにとっても大切な人だ。だから、このお金は水香が心からがんばりたいと思ふことに使いたいと思つていて。最初は医者になりたいと言つていたから、そのために使おうと考えていたんだ。だけど、最近の水香を見て、水香はトランペットも本気でがんばりたいんだと思つて買つてあげることにしたんだ。」

## 第55回中学生作文コンクール

お祖父ちゃんは私のためにこんなギフトをくれたと思うと涙がでた。私はお祖父ちゃんに置いていかれたわけではない、むしろずっと見守られてきたと思えた。そして、ちょうど祖父とトランペットについて話していたのを思い出した。祖父に私は、

「私、絶対吹奏楽部に入って、トランペットを吹く。」  
と豪語していた。そんな私に祖父は

「じゃあ水香の楽器はお祖父ちゃんが買ってあげよう。」  
といつも言ってくれていた。祖父はそんな私のために覚えてくれたのだ。それがたまたまなくうれしかった。それから、毎日トランペットを吹くときには祖父がそばにいるような気がする。

身近な人が亡くなることは、とても悲しくむなしいことだ。そのときはなかなか受け入れられないことだろう。それでも、生命保険はその事実と共に私たちを優しく包んでくれる。生命保険はもはや、私たちにあって、なくてはならないものなのだ。私を優しく、あたたく包んでくれた生命保険は、今もどこかで誰かのことを助けていることだろう。